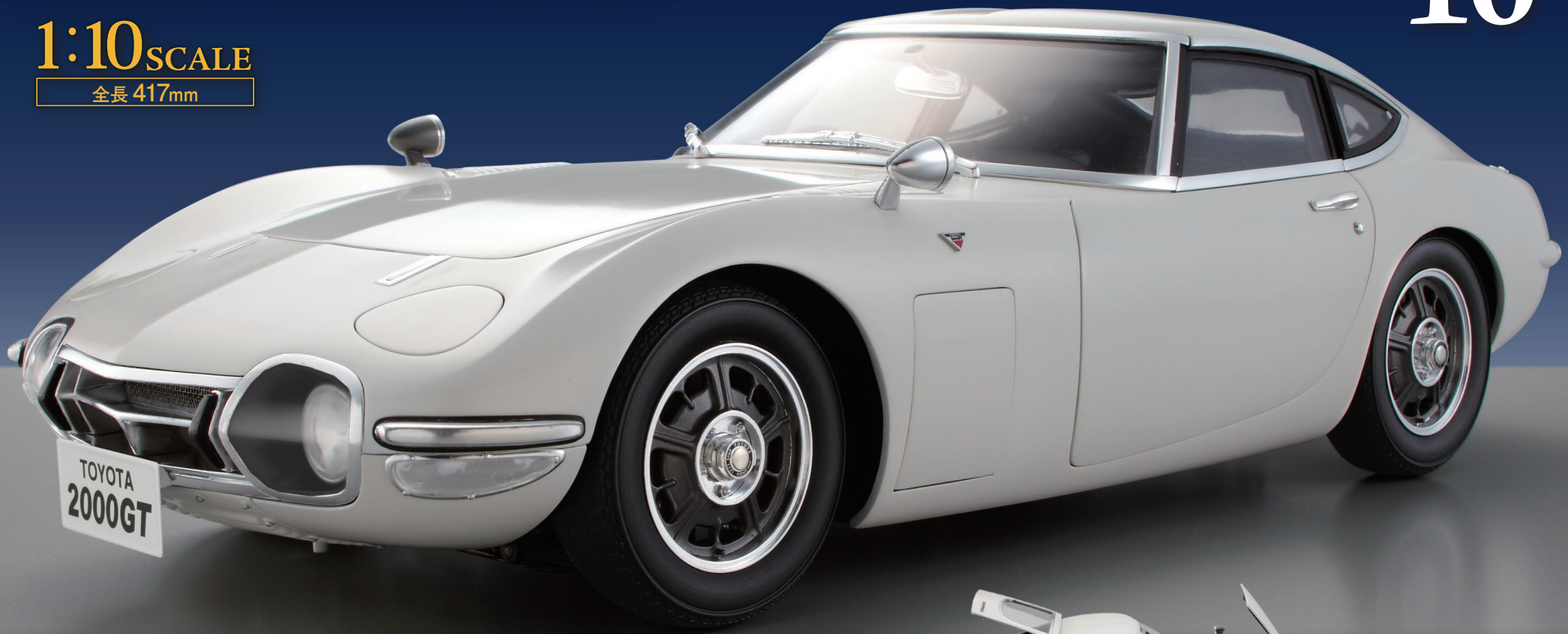
トヨタ 2000GT

TOYOTA 2000GT

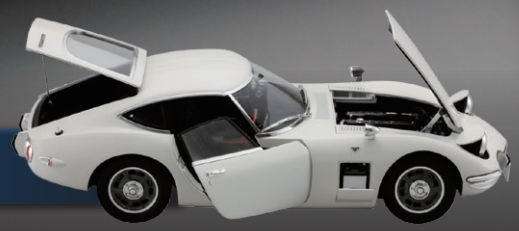
見る者を魅了する流麗なフォルム。
日本車史上、もっとも美しいスタイル。

10

1:10 SCALE
全長 417mm



今なお語り継がれる伝説のグランドツーリングカーを再現！

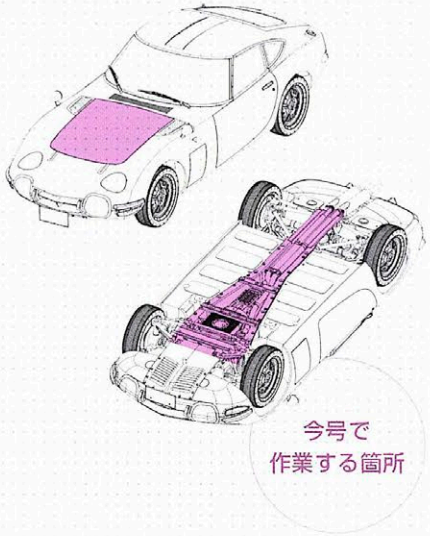


DeAgostini
COLLECTIBLES

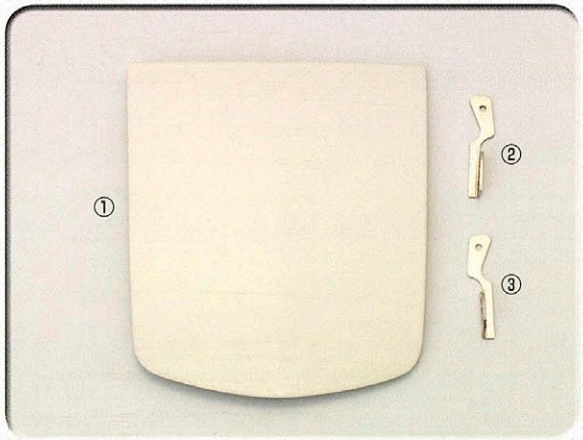
48号

フードにヒンジを仮留めし、エンジンをシャシーフレームに搭載する

今号では、フード（一般にはボンネットと呼ばれるが、実車2000GTのパーツ名称では「フード」となっている）に、フードヒンジを仮留めする。また、17号で組み立てたエキゾーストパイプ&マフラーと23号で組み立てたエンジンを、43号で組み立てたシャシーフレームに搭載する。



今号のパーツ



①フード×1
②左フードヒンジ×1
③右フードヒンジ×1

使用する道具

・プラスドライバー（1番）

あると便利な道具

・多用途接着剤
（セメダイン「スーパーX-G」を推奨）
・カッターナイフ
・ホビー用ダイヤモンドヤスリ

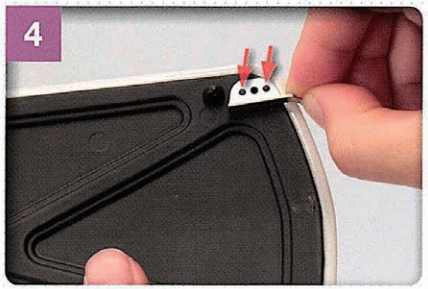
用意するもの

・マスキングテープ
・エキゾーストパイプ&マフラー（17号で組み立てたもの）
・エンジン（23号で組み立てたもの）
・シャシーフレーム（43号で組み立てたもの）
・ビス（Dタイプ）×2（35号で提供したもの）
・ビス（Lタイプ）×1（35号で提供したもの）
・ビス（Mタイプ）×2（35号で提供したもの）

①フードを裏返して持ち、写真で示した位置に②左フードヒンジをセットする。左フードヒンジの向きを間違えないよう、写真と照らし合わせよう。

左フードヒンジの取り付け部をフード裏面の取り付けピンに押し込む。今回の作業は仮留めなので、簡単に外れてしまっても問題はない。

マスキングテープを使い、左フードヒンジを仮留めする。



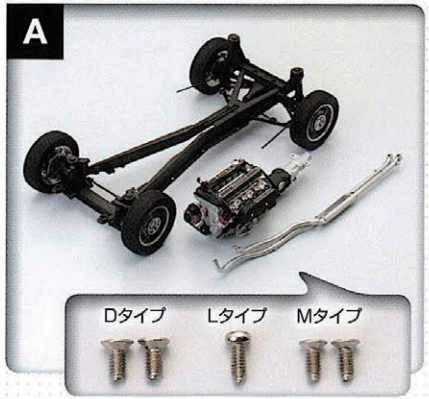
③右フードヒンジを用意して写真で示した位置にセットし、2同様にフード裏面の取り付け部に押し込む。

マスキングテープを使い、右フードヒンジを仮留めする。

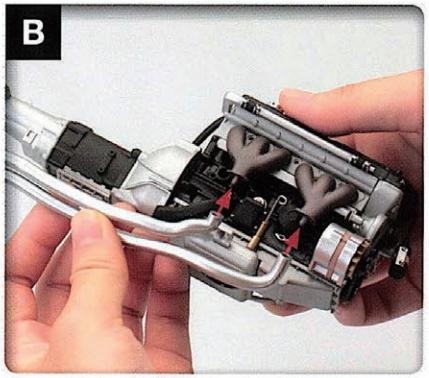
今号の完成

これで今回の作業は完了だ。仮留めした左右のフードヒンジは、ビスが提供された段階で固定するので、それまで大切に保管しておこう。

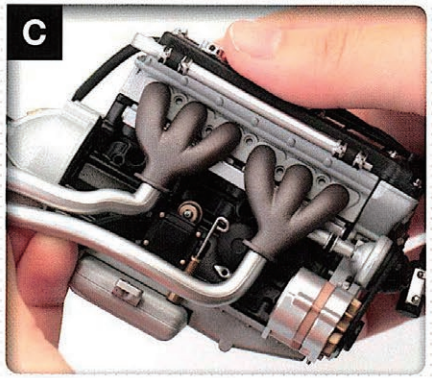
【エンジンをシャシーフレームに搭載する】



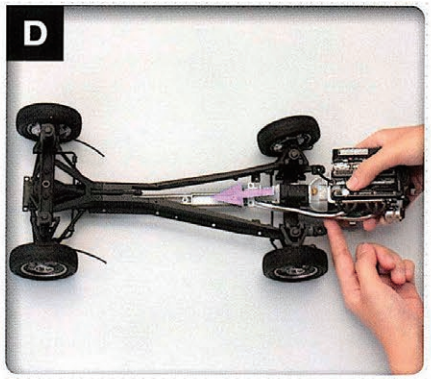
17号で組み立てたエキゾーストパイプ&マフラー（仮留めしたマフラーは外しておく）、23号で組み立てたエンジン、43号で組み立てたシャシーフレーム、35号で提供したビス（Dタイプ、Lタイプ、Mタイプ）を用意する。各パーツに不具合がないか、しっかり確認しておこう。



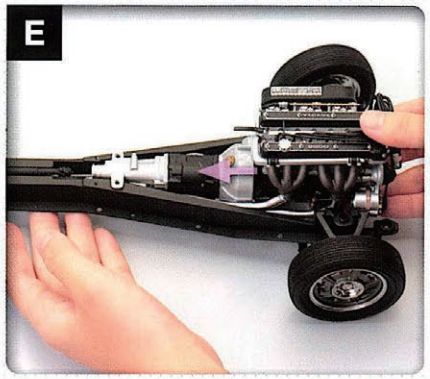
エキゾーストパイプを用意し、写真で示したエンジン右側面のマニホールドにセットする。



マニホールドから突き出した取り付けピンを、エキゾーストパイプの取り付け穴に差し込む。接着の必要はないが、ぐらつきなど気になるようであれば、多用途接着剤を取り付けピンの先端に少量塗布するといい。

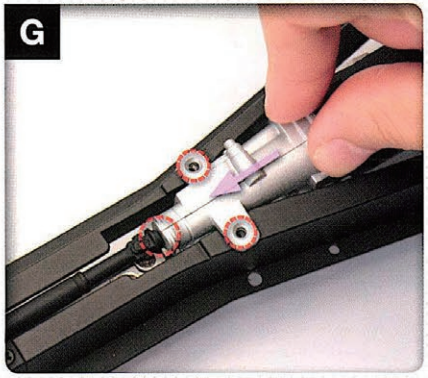


シャシーフレームを置き、エキゾーストパイプが抜け落ちないよう保持したまま、エンジンをフロント側から写真で示したように差し入れる。

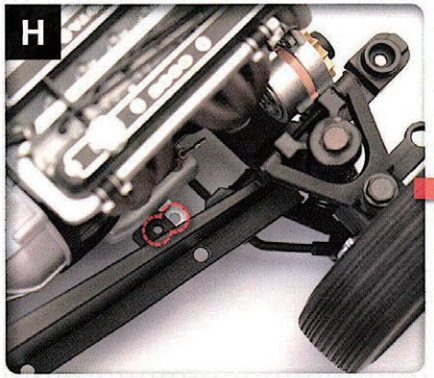


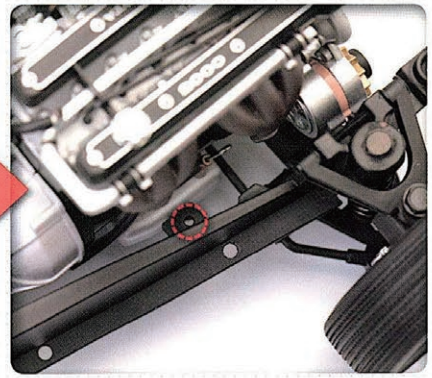
写真で示した部分をフレームの上面に載せ、真っすぐリヤ方向にスライドさせる。

ミッションケース後端には取り付け穴が設けられており、そこにプロペラシャフト先端の取り付けピンを差し込む。

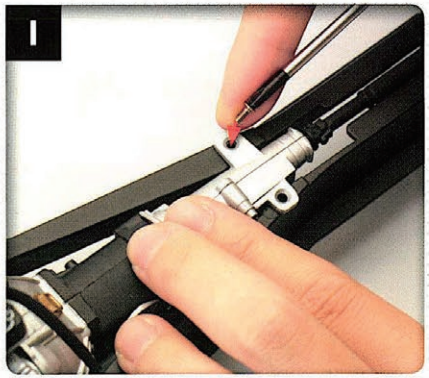


ミッションケースを持ってエンジンブロックをリヤ方向にスライドさせ、プロペラシャフトと連結する。このとき、写真で示したビス穴の重なり具合を確認する。

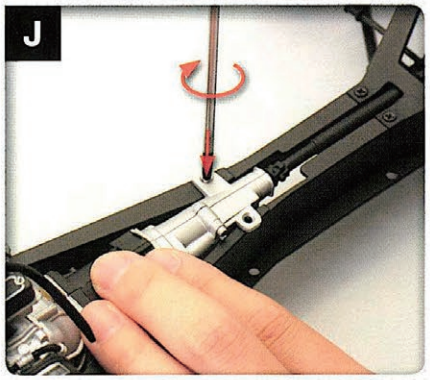




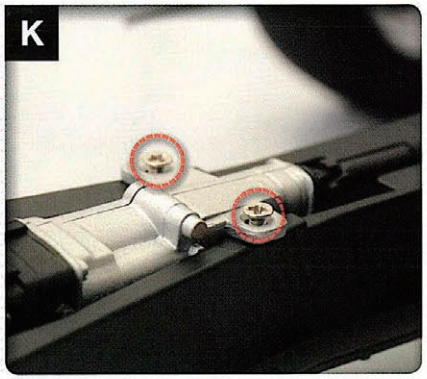
E～Gの作業の際、エンジンブロックのオイルパン両サイドに設けられた取り付け部は、シャシーフレームに設けられたマウントの下にもぐり込ませる(写真は、判別しやすいようエキゾーストパイプを外した状態で撮影)。また、Gと同様にこちらもビス穴の重なり具合を確認すること。



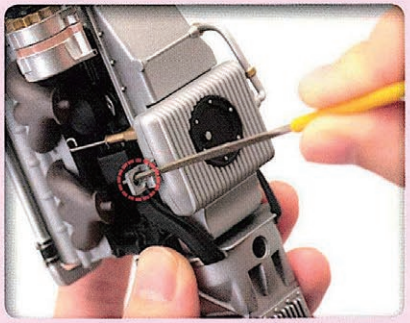
ビス穴が正しく重なったら、35号で提供したMタイプのビスを用意し、写真で示したビス穴にセットする。

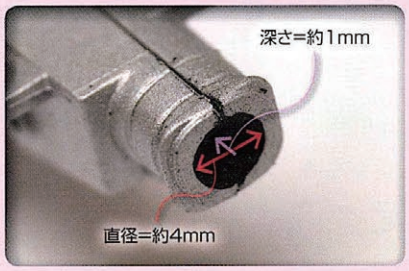


1番のプラスドライバーを使い、Mタイプのビスを軽くねじ込む。もう片側のビス穴にも、同じ要領でMタイプのビスをねじ込んでおく。



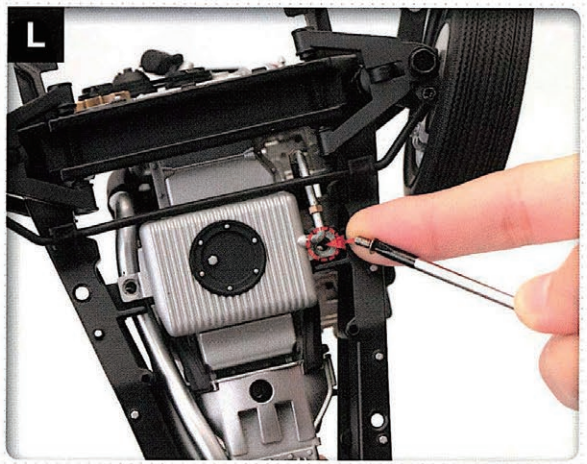
I、Jで作業するMタイプのビスのねじ込み加減は、写真で示した程度にしておく。



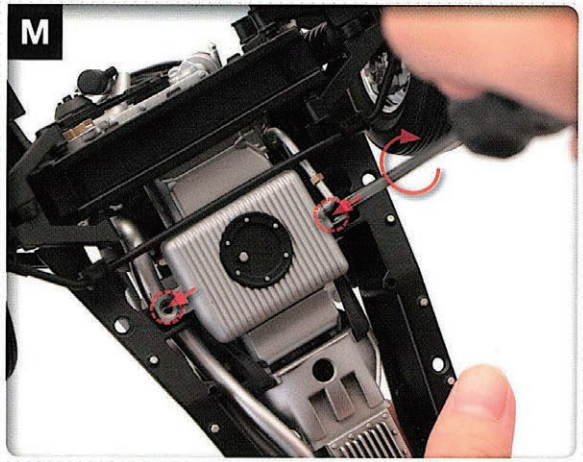


G、Hでビス穴の重なり具合を確認し、穴のずれが0.5mm未満であればそのまま次の工程に進もう。
穴のずれがそれ以上大きかった場合は、ホビー用ダイヤモンドヤスリを使って、オイルパン両サイドのビス穴を少しだけ前後方向に削って広げる(写真上)。ミッションケース後端の取り付け穴を中心点とし、直径4mm、深さ1mmほどくぼませる(写真下。その際ミッションケース後端の取り付け穴は無視していい)。カッターナイフやホビー用ダイヤモンドヤスリを使い、少しずつ慎重に削っていこう。

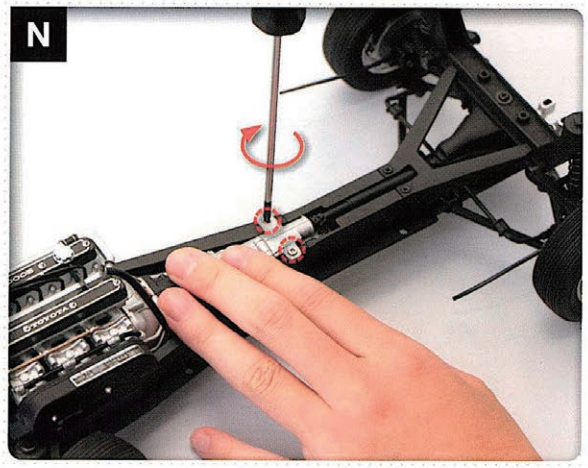
[ビス穴のずれについて]
ビス穴のずれは、亜鉛合金製パーツと樹脂製パーツの成型後に起こる熱収縮によるもので、製品不良ではございません。上記の手順に沿って対処くださいますようお願いいたします。



シャシーフレームを裏返して持つ。35号で提供したDタイプのビスを用意し、写真で示したビス穴にセットする。

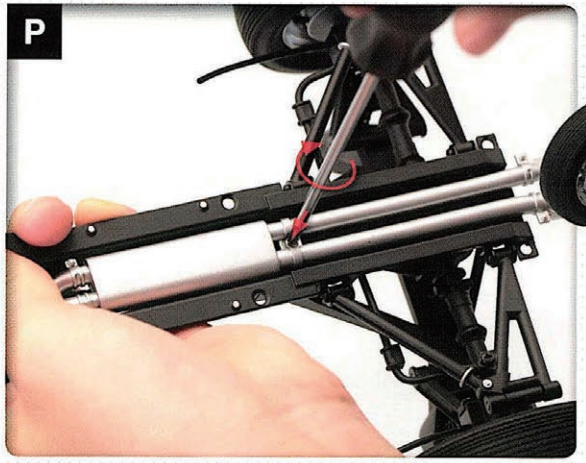


1番のプラスドライバーを使い、Dタイプのビスをねじ込む。もう片側のビス穴にも、同じ要領でDタイプのビスをパーツがガタつかない程度にねじ込んでおく。

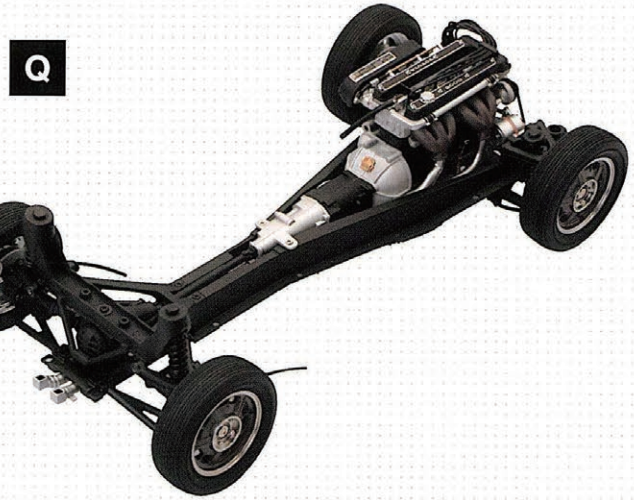


シャシーフレームを表に戻して置き、軽くねじ込んでおいたMタイプのビスを2本とも締め込む。

再びシャシーフレームを裏返して持ち、マフラーがシャシーフレームにはめ込まれていることを確認する。次に、写真で示したビス穴に、35号で提供したLタイプのビスをセットする。



1番のプラスドライバーを使い、Lタイプのビスをパーツがガタつかない程度にねじ込む。もしもビス穴が緩くてねじ込めない場合は、ビスの先端に多用途接着剤を少量塗布してからねじ込む。

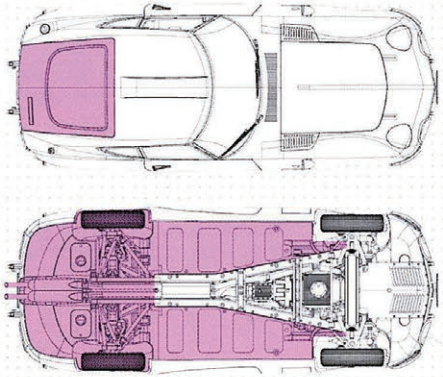


これでエンジンの搭載作業は完了だ。エンジンを固定するビス穴の位置がずれている場合、若干の小加工を施す必要はあるが、決して難しい加工ではないので焦らずに作業しよう。

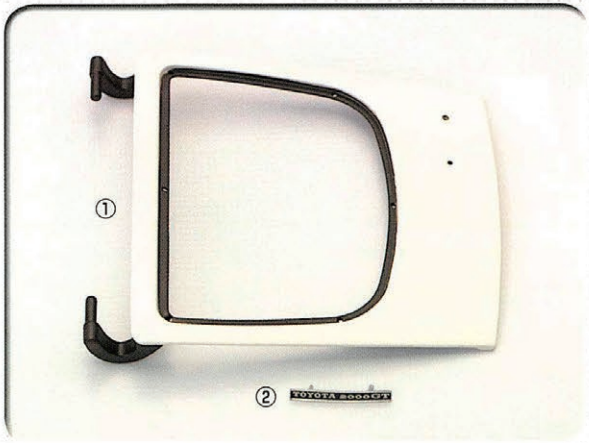
49号

バックドアに車名ロゴをはめ込み、シャシーフレームにシャシーパネルを取り付ける

今号では、バックドアに車名ロゴをはめ込む。また、48号で組み立てたシャシーフレームに、43号で提供したシャシーパネルと、48号で仮組みから外したマフラーを取り付ける。組み立てに使用するビスの本数が多いので、事前に保管しておいたビスをチェックしてから作業に取り掛かろう。



今号のパーツ



①バックドア×1
②車名ロゴ×1

使用する道具

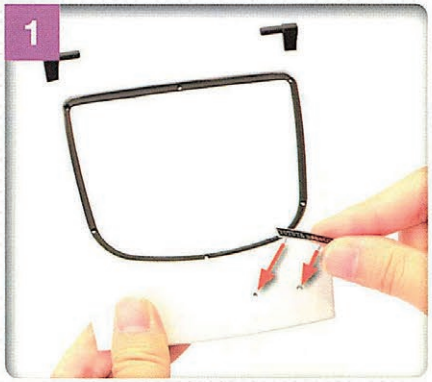
- プラスドライバー(1番)
- ニッパー(4号で提供したもの)
- カッターナイフ
- ピンセット(2号で提供したもの)

あると便利な道具

- タオルなどの柔らかい布

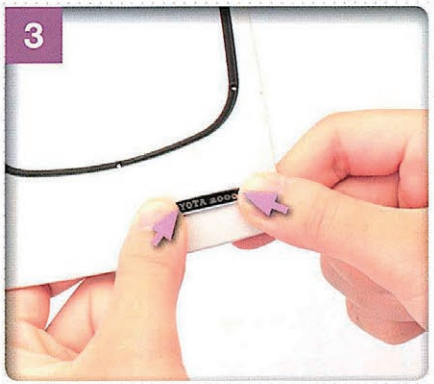
用意するもの

- マスキングテープ
- シャシーフレーム(48号で組み立てたもの)
- マフラー×2(48号で仮組みから外したもの)
- シャシーパネル(43号で提供したもの)
- ビス(CCタイプ)×10(43号で提供したもの)
- ビス(Hタイプ)×2(41号で提供したもの)



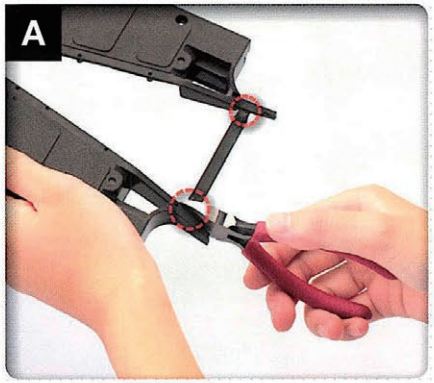
①バックドアを写真のように持ち、②車名ロゴをバックドア右下の取り付け部にセットする。「TOYOTA 2000GT」の車名ロゴが逆向きにならないよう注意しよう。

車名ロゴの裏から突き出した取り付けピンは、左側が細く、右側が少し太い。差し込みにくい場合は、左側の細いピンの先端を先にセットすると差し込みやすい。



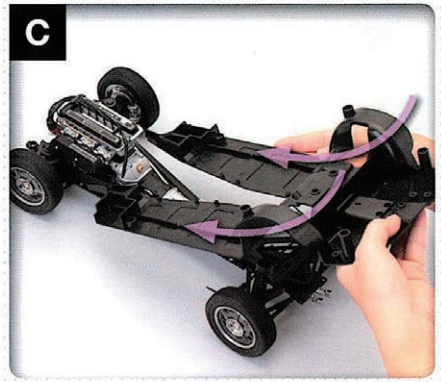
車名ロゴを真っすぐに押し込み、バックドアに固定する。

【シャシーフレームにシャシーパネルを取り付ける】



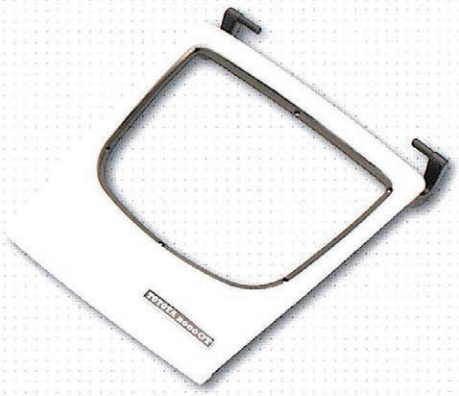
43号で提供したシャシーパネルを用意し、写真で示したランナーとパーツの継ぎ目部分（ゲート）を4号で提供したニッパーで切る。切り取ったランナーは不要だ。

カットした部分に「バリ（パーツに残ったゲートの端）」が残らないよう、カッターナイフを使って削り取る（赤く色を付けた部分）。手を切らないよう十分に注意しよう。

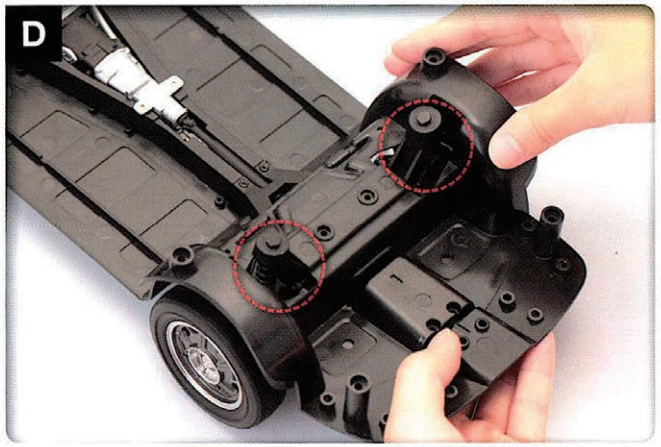


48号で組み立てたシャシーフレームを用意し、Bの処理を終えたシャシーパネルを写真のようにセットする。

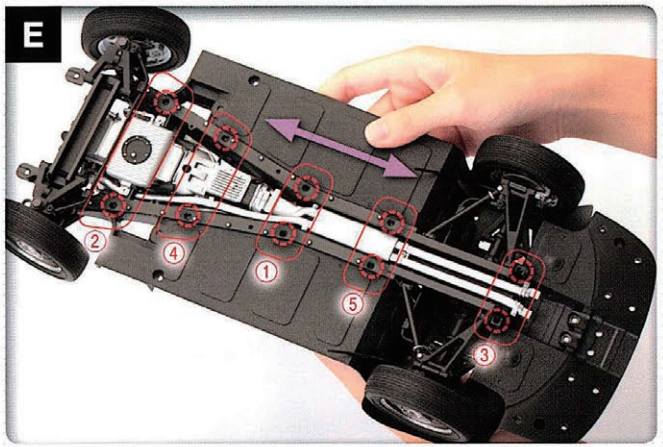
今号の完成



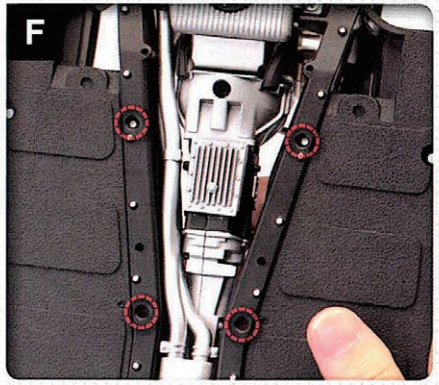
これでバックドアの作業は完了だ。50号ではバックドアウインドウを提供し、取り付ける予定なので、組み立てたパーツが傷つかないよう大切に保管しておこう。



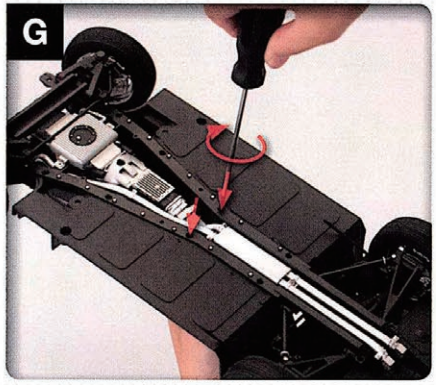
シャシーパネル後方の開口部からは、シャシーフレーム後部のダンパーが突き出す。シャシーパネルを前後にずらし、ガタつかない状態にしておこう。



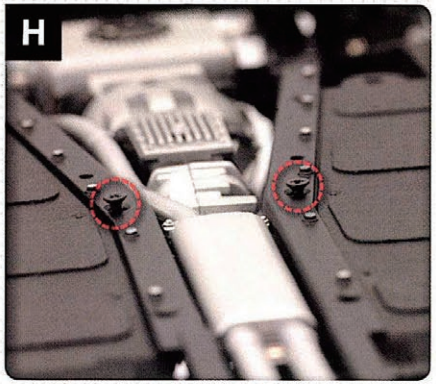
シャシーフレームとシャシーパネルを重ね合わせたまま裏返す。パーツに傷がつかないよう、下にタオルなど敷くといいだろう。次に、写真で示したビス穴（計10カ所）の重なり具合を確認する。シャシーフレーム側は「皿ビス加工（すり鉢状にくぼんでいる）」が施されている。その穴と、下に見えるシャシーパネルのビス穴が重なるように、シャシーパネルを動かして位置を調整する。なお、写真の数字はビスを入れる順番だ。



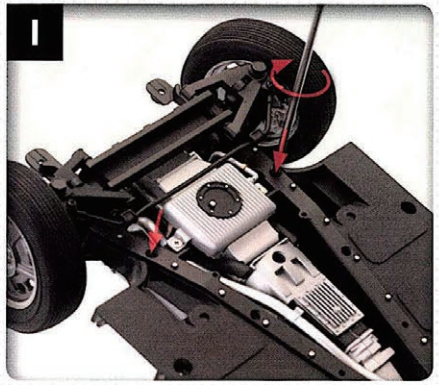
Eの状態を拡大した写真。シャシーフレーム側のビス穴と、シャシーパネル側のビス穴が、この写真と同程度に重なっていれば問題ない。



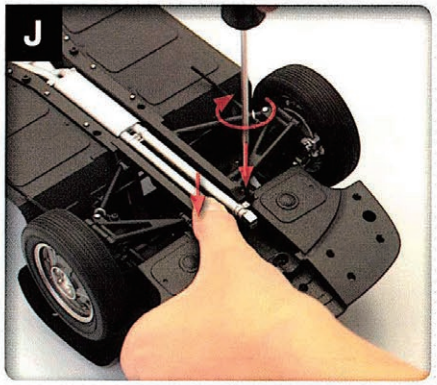
43号で提供したCCタイプのビスを用意し、写真で示したビス穴（2カ所）にセットし、1番のプラスドライバーを使って軽くねじ込む。



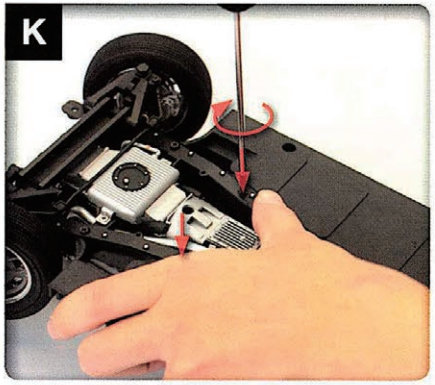
Gでねじ込むビスの“ねじ込み加減”は、写真で示した程度にする。



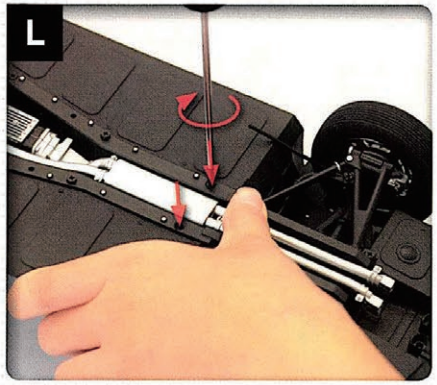
次に、写真で示したフロント寄りのビス穴（2カ所）にCCタイプのビスをセットし、Hと同程度にねじ込む。



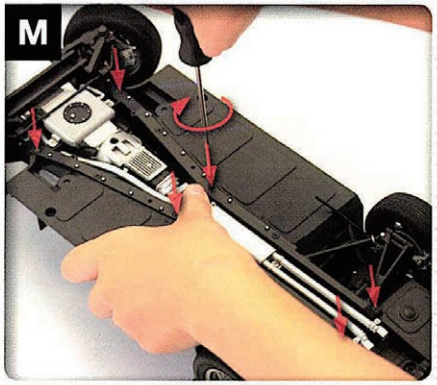
写真で示したリヤ寄りのビス穴（2カ所）にCCタイプのビスをセットし、Hと同程度にねじ込む。



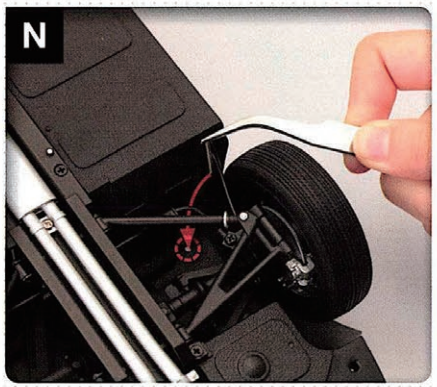
シャシー中央のフロント寄りに設けられたビス穴（2カ所）にCCタイプのビスをセットし、1番のプラスドライバーを使ってねじ込む。なお、このビスは“ねじ込めるところ”までねじ込んでいい。



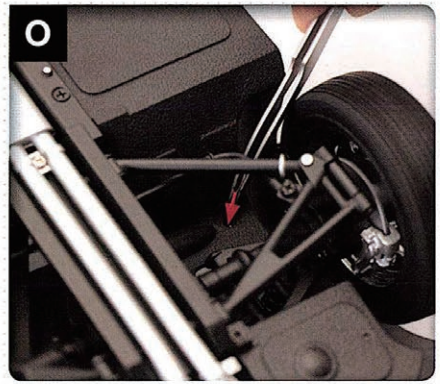
シャシー中央のリヤ寄りに設けられたビス穴（2カ所）にCCタイプのビスをセットし、プラスドライバーを使ってねじ込む。このビスも“ねじ込めるところ”までねじ込んでいい。



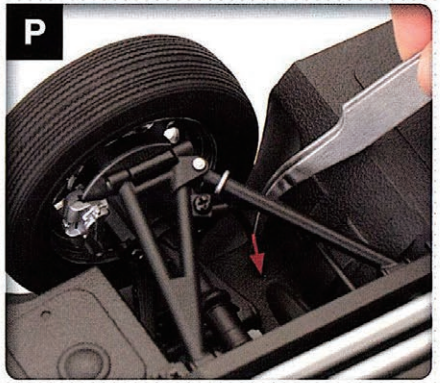
G、I、Jで軽くねじ込んでおいた6本のビスを、1番のプラスドライバーを使って“ねじ込めるところ”までねじ込む。



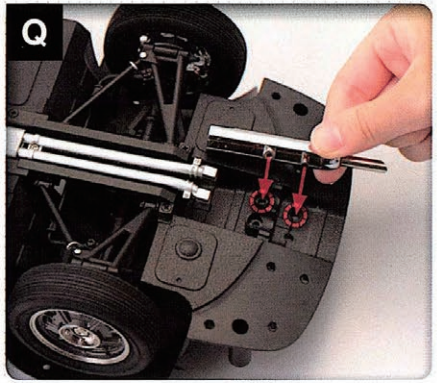
2号で提供したピンセットを使い、リヤハブから伸びているブレーキホースの先端を、写真で示したシャシーパネルの穴にセットする。このとき、ブレーキホースはスタビライザーとシャシーパネルの間を通す。



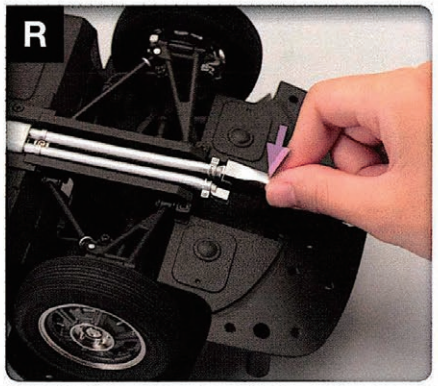
セットしたブレーキホースを、ピンセットでシャシーパネルの穴に差し入れる。ブレーキホースが少したるんだ状態になるまで差し入れよう。



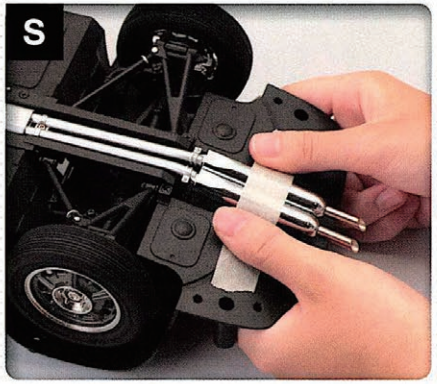
反対側のブレーキホースも、同じ要領でシャシーパネルの穴に差し入れる。



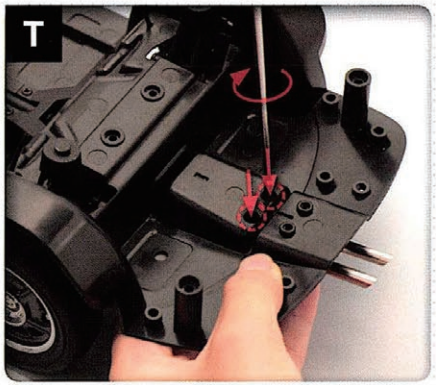
48号で仮組みから外したマフラーを用意し、写真で示した位置にセットする。



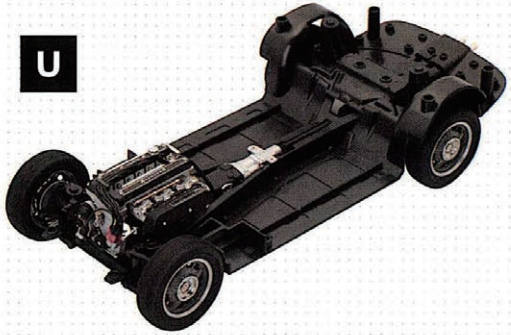
マフラーを真っすぐに押し込み、シャシーパネルにはめ込む。1本をセットしたら、もう1本も隣の同じポイントにセットしよう。



はめ込んだマフラーが抜け落ちないよう、マスキングテープを貼って押さえておく。



シャシーを表向きに戻して置き、写真で示したビス穴に41号で提供したHタイプのビス2本をセットする。続いて1番のプラスドライバーを使い、2本のマフラーがガタつかなくなるまでねじ込む。ねじ込み終えたら、マスキングテープははがしておこう。

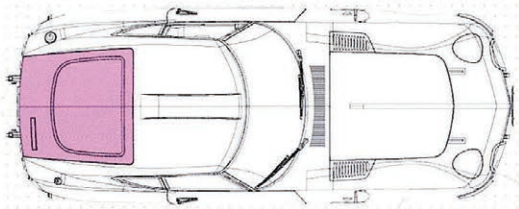


これで、シャシーパネルの取り付け作業は完了だ。シャシーフレームとシャシーパネルのビス穴が大きくずれている場合は、シャシーパネルが保管中にゆがんでしまった可能性が考えられる。その場合は無理に取り付けず、シャシーパネルを平らな台の上に置いて1週間ほど放置し、ゆがみが元に戻ってから作業しよう。

50号

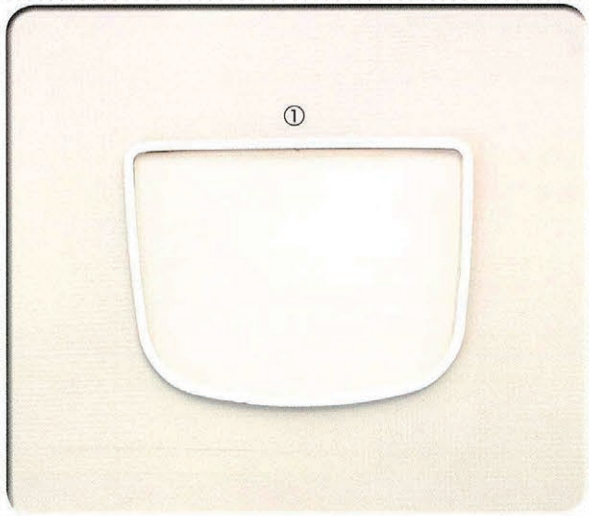
バックドアに バックドアウインドウを取り付ける

今号では、49号で組み立てたバックドアに「バックドアウインドウ」を取り付ける。バックドアウインドウは、ウインドウ本体となる透明な樹脂パーツに、メッキ処理を施したウインドウリムを接着した状態で提供される。透明なパーツやメッキ処理されたパーツは、表面に傷が付かないよう注意して扱おう。



今号で
作業する箇所

今号のパーツ



①バックドアウインドウ×1

使用する道具

・特になし

用意するもの

・バックドア（49号で組み立てたもの）

あると便利な道具

・多用途接着剤（セメダイン「スーパーX-G」を推奨）

Parts in focus

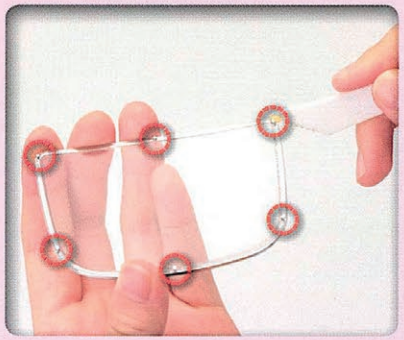
実車のTOYOTA2000GTがリリースされた1967年当時、バックドアを備える市販車といえば商用車が大多数を占めた。その中にあって、あえて3ドア・ハッチバックスタイルを打ち出したことは、後の国産車のデザインに多大な影響を及ぼすことになった。本モデルでは、ウインドウガラスを固定しているメッキリムをジョイント用パーツに利用し、バックドアにはめ込むだけでリアルな仕上がりが楽しめるようになっている。

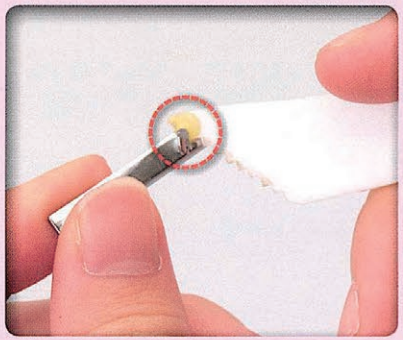
49号で組み立てたバックドアを用意し、写真で示した位置にバックドアウインドウをセットする。バックドアウインドウには表裏があり、取り付け面の周囲には短い取り付けピンが6本設けられているので、簡単に判別することができる。

バックドアウインドウを慎重にバックドアへ取り付ける。取り付けピンは細く短いので注意しよう。

バックドアウインドウの縁部分を押し込んで、バックドアに固定する。

パーツが外れやすい場合の対処





バックドアウインドウが簡単に外れてしまう場合は一度取り外し、裏面の取り付けピンに少量の多用途接着剤を塗布してから取り付けよう。また、49号でバックドアに取り付けた車名ロゴが外れやすい場合も、同じ要領で取り付けるといい。

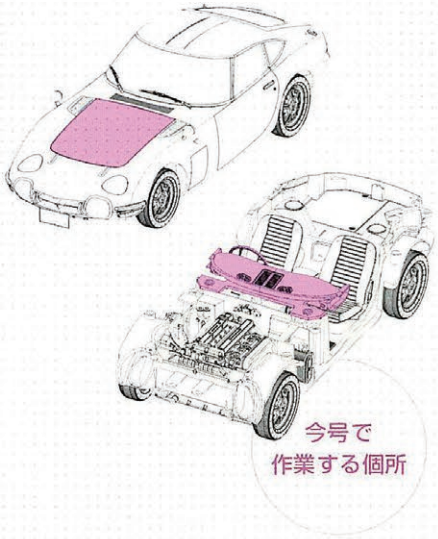
今号の完成

これで今回の作業は完了だ。バックドアはモデルの完成後も開閉が可能なので、バックドアウインドウや車名ロゴが抜け落ちないようにする必要がある。必要に応じて多用途接着剤を使って固定しよう。

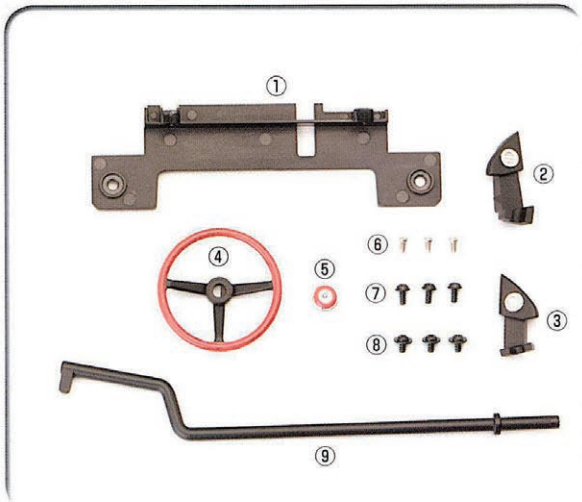
51号

インストルメントパネルにダッシュボードを取り付ける

今号では、26号で組み立てたインストルメントパネルに「ダッシュボード」を取り付ける。また、前輪の動きに連動するステアリングシャフトとハンドル、ダッシュボード左右のエアダクトも取り付け、さらに48号でフードに仮留めしておいたフードヒンジを固定する。作業工程が多いので、順序立てて作業を進めよう。



今号のパーツ



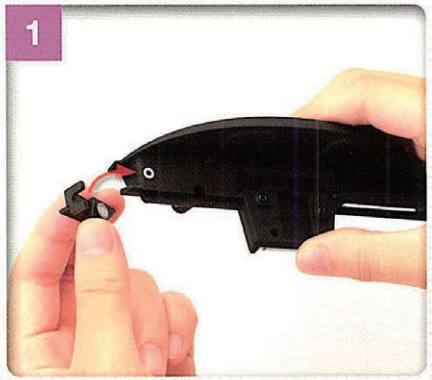
①ダッシュボード×1
②左エアダクト×1
③右エアダクト×1
④ハンドル×1
⑤クラクション×1
⑥ビス(GGタイプ)×3(※1本は予備)
⑦ビス(BBタイプ)×3(※1本は予備)
⑧ビス(IIタイプ)×3(※1本は予備)
⑨ステアリングシャフト×1

使用する道具

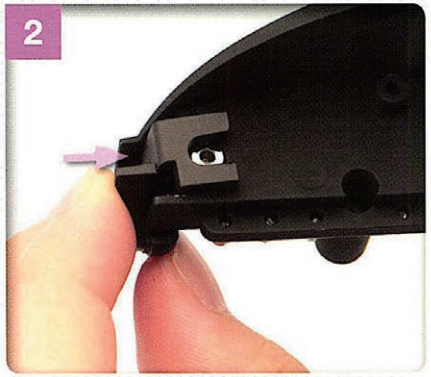
・ロングタイプドライバー
(9号で提供したもの)

用意するもの

・インストルメントパネル(26号で組み立てたもの)
・フード(48号で仮組みしたもの)
・柔らかい布(タオルで可)



26号で組み立てたインストルメントパネルと、③右エアダクトを用意し、写真で示したインストルメントパネル右側面(写真は裏面)に、右エアダクトをセットする。



右エアダクトを奥まで押し込む。このとき、インストルメントパネル裏面に取り付けポストが突き出している場合は、右エアダクトの切り欠き部分に差し込む。突き出していない場合は、次の3の手順で対処する。

写真のように、インストルメントパネルを表面と裏面から挟むようにして押し合わせる。すると、インストルメントパネル裏面に取り付けポストが突き出すので、右エアダクトの切り欠き部分に差し込むようにする。

4

⑦ビス（BBタイプ）と⑧ビス（IIタイプ）を比較する。ビスの太さは同じだが、ワッシャー部分の大きさが違うので、簡単に見分けることができる。

5

IIタイプのビスを用意し、写真で示したインストルメントパネル裏面ポストのビス穴にセットする。ポストが引っ込まないよう、インストルメントパネルは3の要領で保持しておこう。

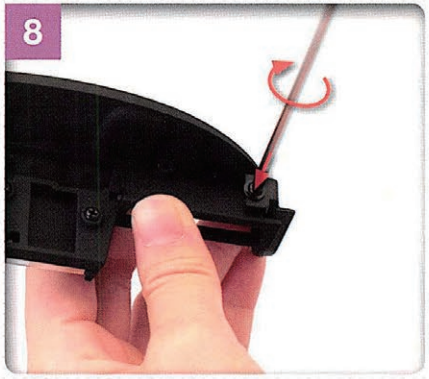
6

9号で提供したロングタイプドライバーを使い、IIタイプのビスをねじ込む。各パーツが動かなくなればOKだ。

7

②左エアダクトを用意し、写真で示したインストルメントパネル左側面にセットする。

8



IIタイプのビスをポストのビス穴にセットし、ロングタイプドライバーでねじ込み、左エアダクトを固定する。

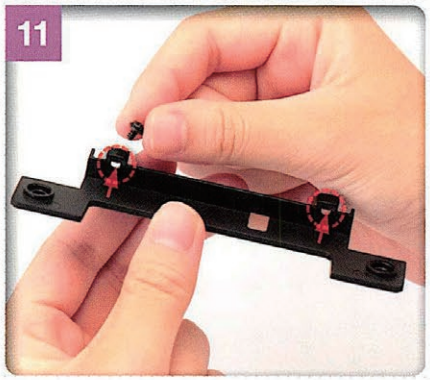
9

⑨ステアリングシャフトを用意し、写真で示したインストルメントパネル裏の穴に、シャフト先端を差し込む。先端はD字形になっているが、差し込む向きは気にしないでいい。

10

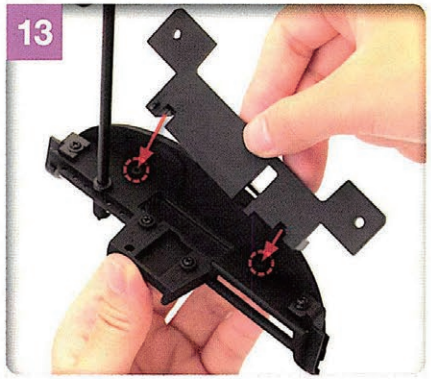
ステアリングシャフトが差し込みにくい場合は、シャフトを左右に回転させながら、ねじ込むような感じで押し込む。シャフトの段差部分がパーツに当たるまで押し込もう。

11



①ダッシュボードとBBタイプのビス2本を用意し、写真で示したビス穴2カ所に差し込む。

BBタイプのビス2本を差し込んだ状態。写真ではビスのアタマが見える角度で持っているが、ビスが抜け落ちないようパーツを立てて保持する。



BBタイプのビスを差し込んだダッシュボードを、写真で示したインストルメントパネル裏面上部にセットする。インストルメントパネル裏面の2本のポストに、BBタイプのビスをセットした切り欠き部分を写真のようにはめ込もう。

BBタイプのビスが抜け落ちないよう注意しながら、ダッシュボードをインストルメントパネル裏面に押し込む。この段階では、パーツの間に多少のすき間があっても問題ない。

ロングタイプドライバーを使い、ダッシュボードとインストルメントパネルの間から、BBタイプのビスをゆっくりとねじ込む。ビス穴の位置が確認しにくいので、少しずつ感触を確かめながら作業しよう。

もう1本のBBタイプのビスも、ロングタイプドライバーでねじ込む。2本のビスをねじ込み、ダッシュボードがインストルメントパネル裏面に固定されればOKだ。

インストルメントパネル正面を手前に向けたら、ステアリングシャフトを回し、写真で示したクランク部分が「真上」を向くように調整する。

④ハンドルを用意し、中央の穴とステアリングシャフト先端の形状を確認する。両方とも「D字形」になっているので、形状を合わせてはめ込む。

ハンドルをゆっくりとステアリングシャフト先端に差し込んでいく。このとき、ハンドルの周囲に無理な力を加えると、パーツが破損する恐れがあるので注意すること。

⑤クラクションを用意し、ハンドル中央の穴にセットする。クラクションの中央にはマークがあるので、写真と同じ向きになるよう調整しよう。

クラクションをハンドルの中心部に押し込む。このとき、ステアリングシャフトが抜けてしまうようなら、裏側からシャフトを押さえておこう。

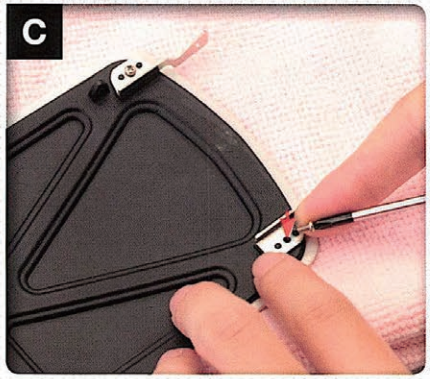
今号の完成

これでダッシュボードの取り付けは完了だ。ステアリングシャフトの先端は、前輪の動きに連動して左右に回転し、同軸上にあるハンドルを動かす。本来はハンドルの動作によって前輪を動かすのだが、モデルでは「ラック&ピニオン機構」を省略している。そのため、残念ながらハンドル操作で前輪を動かすことはできないので注意してもらいたい。

【フードにフードヒンジを固定する】

タオルなどの柔らかい布を平らな台の上に敷き、48号で仮組みしたフードを裏返しにして置く。次に片側のフードヒンジを押さえた状態で仮留めのマスキングテープをはがし、⑥ビス(GGタイプ)を写真で示したビス穴にセットする。

ロングタイプドライバーを使い、GGタイプのビスをねじ込む。フードヒンジが動かなくなればOKだ。



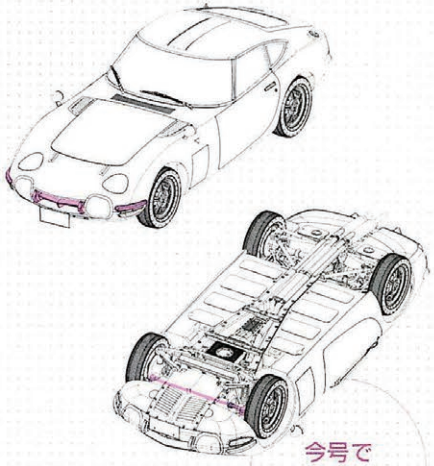
もう片側のフードヒンジも、押さえた状態で仮留めのマスキングテープをはがし、写真で示したビス穴にGGタイプのビスをセットして、Bと同じ要領でねじ込む。

これでフードヒンジの固定は完了だ。フードはボディ提供後に取り付け作業を行うので、それまではパーツ表面に傷などが付かないよう大切に保管しておこう。

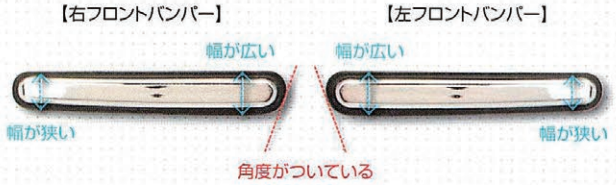
52号

提供パーツのチェックとステアリングタイロッドを取り付ける

今号では、フロント左右に取り付けるバンパーと、フロントグリルを提供する。バンパーの取り付け作業はボディの提供後になるが、左右の判別が難しいので今のうちに確認しておこう。また、42号で提供したステアリングタイロッドの取り付け作業も行う。

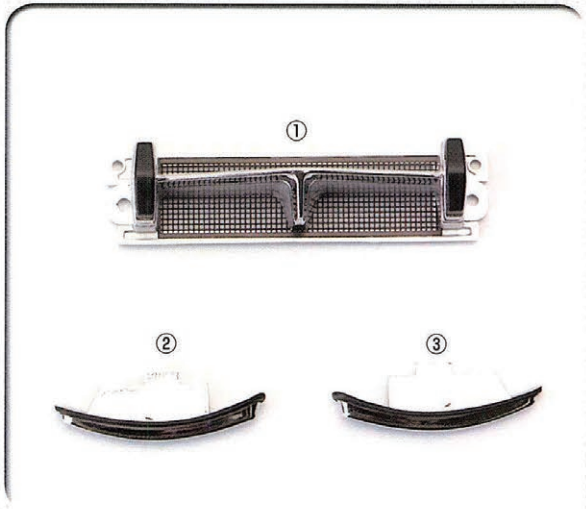


1



②右フロントバンパーと③左フロントバンパーを用意し、パーツを正面から見て形状を確認する。パーツの両端を見ると、片側がわずかに太くなっており、なおかつ“斜め”になっている。この“角度の違い”が左右を見分けるポイントだ。注意深く観察して判別しよう。

今号のパーツ



①フロントグリル×1
②右フロントバンパー×1
③左フロントバンパー×1

使用する道具

・プラスドライバー(1番)

用意するもの

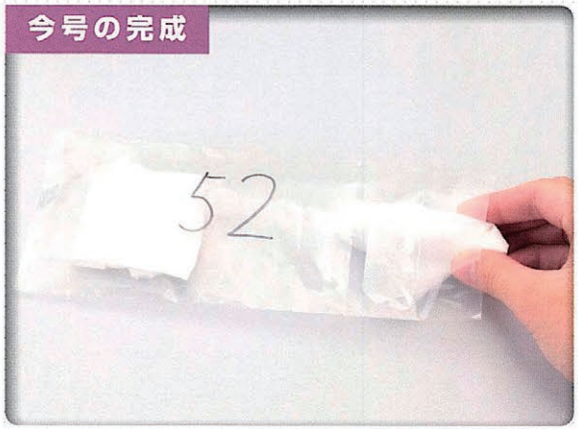
シャシーフレーム(49号で組み立てたもの)
・ステアリングタイロッド(42号で組み立てたもの)
・ビス(AAタイプ)×2(42号で提供したもの)
・油性ペン
・ビニール袋(パーツが入っていた袋で可)
・ティッシュペーパー
・マスキングテープ

Parts in focus

2000GTのフロントバンパーは、フロントマスクの左右コーナーに取り付けられたバナナ形のものと、フロントグリル左右に取り付けられた“く”の字形のものの2タイプで構成される。大型の金属製バンパーが一般的だった当時、そのフォルムはとても斬新なものだった。モデルでは、メッキ処理＋つや消しブラック塗装を施した樹脂製パーツを採用、フロントグリル部は軟質樹脂製として質感を高めている。

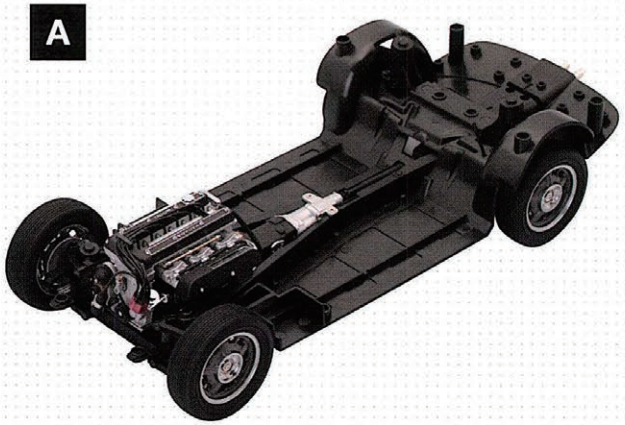
1でフロントバンパーの左右の区別がついたら、写真のようにマスキングテープをパーツに貼り、油性ペンで「L」「R」と記入しておこう。こうすれば組み立て作業時に間違えずに済む。

①フロントグリルを用意し、汚れなどが付着していないか各部をチェックする。このパーツは「フロントグリル」「グリルメッシュ」「左右グリルバンパー」を組み立てた状態で提供されるので、丁寧に扱おう。

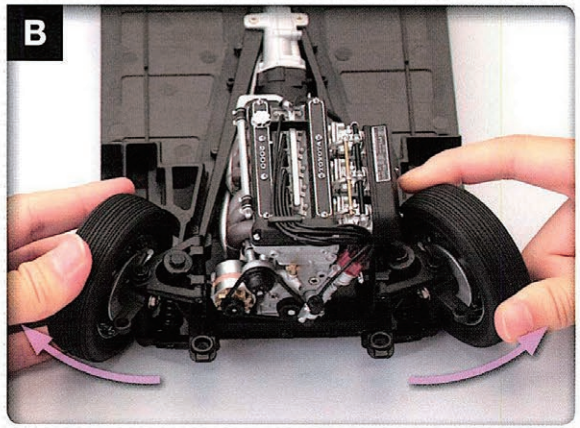


今号のパーツの作業はこれで完了だ。提供したパーツは傷が付かないようティッシュペーパーなどで包み、号数を記入したビニール袋に入れて保管しておこう。

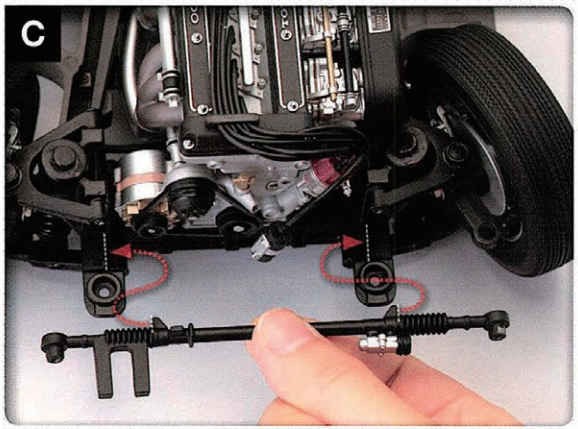
【ステアリングタイロッドの取り付け】



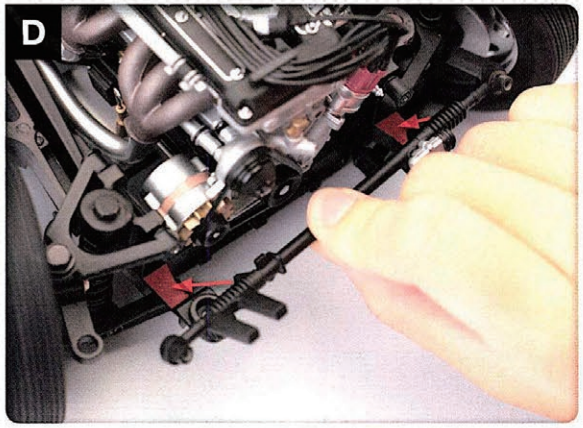
49号で組み立てたシャシーフレームを用意し、各部に破損などがないことをチェックしておこう。



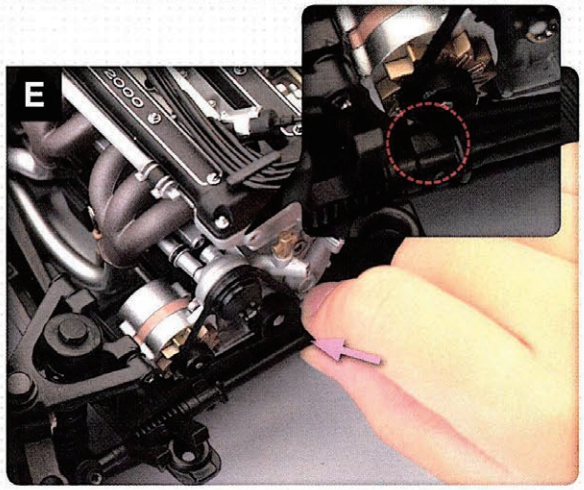
フロント側を手前に向け、両方の前輪を左右に開いておく。



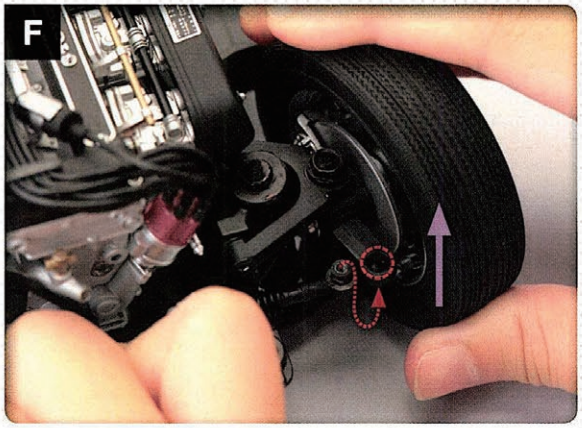
42号で組み立てたステアリングタイロッドを用意し、写真を参照して取り付け位置を確認する。



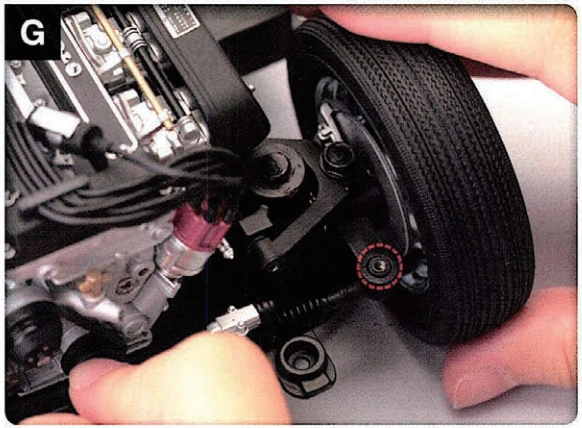
ステアリングタイロッド下部に設けられた2つのツメが、シャシーフレームの間に収まるようにセットする。



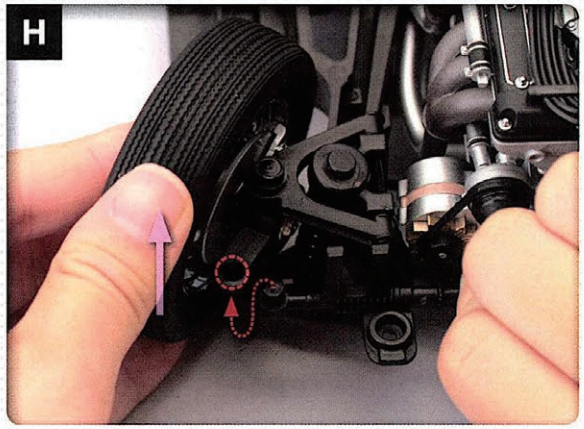
シャシーフレームから伸びている2本のバーのくぼみ部分にステアリングタイロッドをはめ込む。このとき、右前輪側のステアリングタイロッド側面にあるツメ（上写真の赤丸部分）は、オルタネーターファンのプーリーの下にもぐり込ませる。



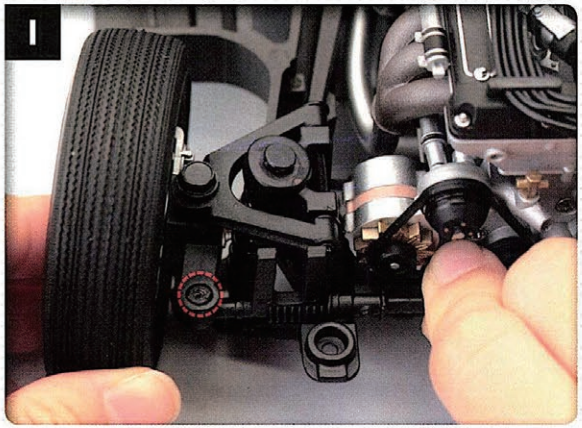
左前輪側のステアリングタイロッド（写真はフレーム前方から見ている）をしっかりと押さえたまま、左前輪を上に持ち上げる。スプリングの反発力があるので、シャシーが持ち上がらないようステアリングタイロッドを押さえ付けておこう。



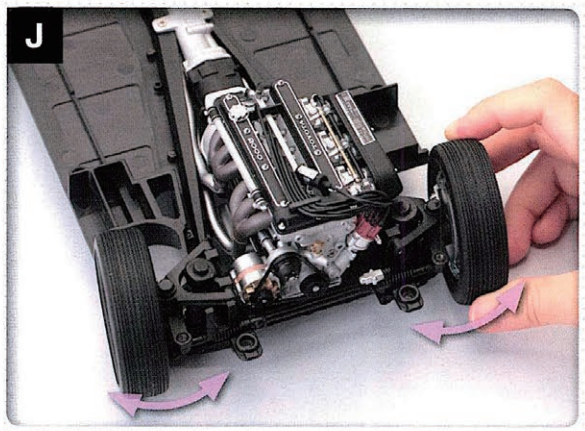
ステアリングタイロッドの先端に設けられているポストを、ステアリングナックルの取り付け穴にはめ込む。



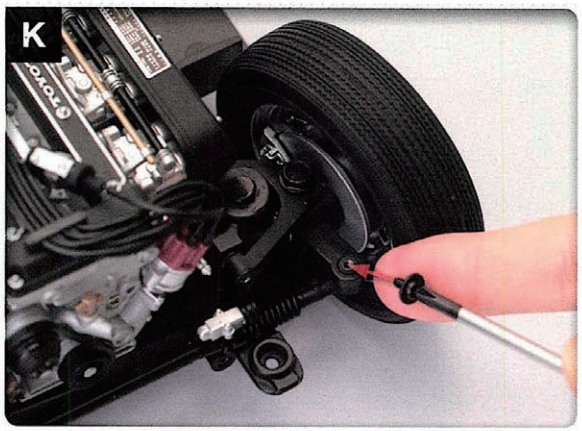
Fと同じ要領で、右前輪側のステアリングタイロッド（写真はフレーム前方から見ている）をしっかりと押さえたまま、右前輪を上に持ち上げる。



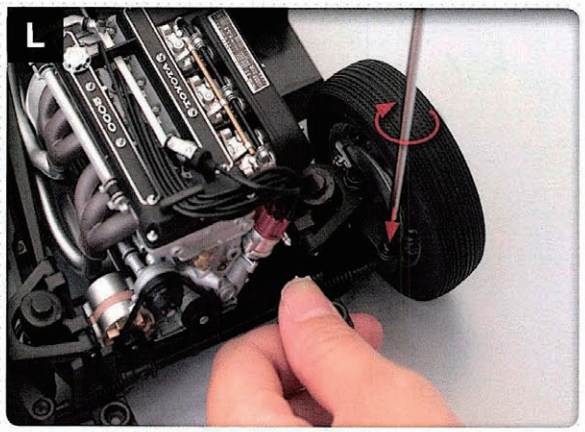
Gと同じ要領で、ステアリングタイロッドの先端に設けられているポストを、ステアリングナックルの取り付け穴にはめ込む。



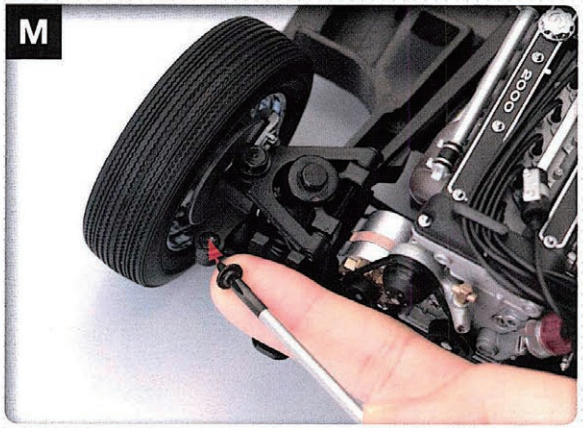
前輪を左右に動かし、左右が連動していることを確認しよう。なお、前輪を動かしたときに、左右アクスルシャフトがダンパーに干渉し、多少の“引っかかり感”がある場合もあるが、完成時には解消されるので問題はない。



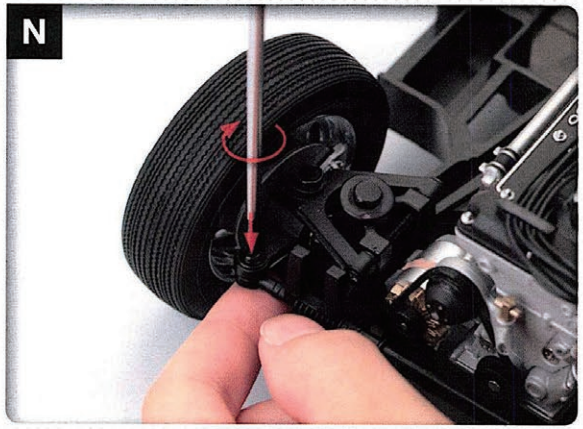
42号で提供したAAタイプのビスを用意し、写真で示したステアリングタイロッドのビス穴にセットする。



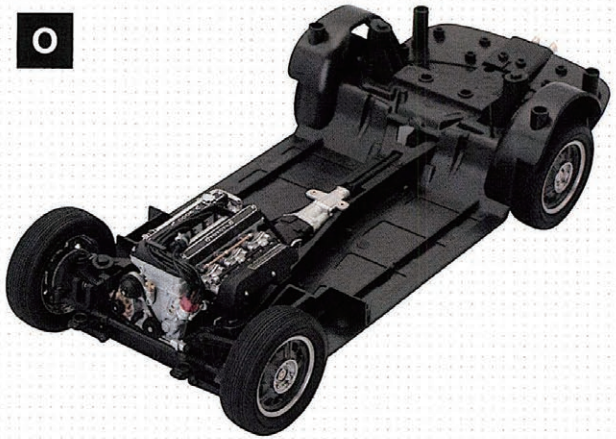
1番のプラスドライバーを使い、ビスを真っすぐにねじ込む。ビスがねじ込めなくなったらOKだ。



右ステアリングナックルにはめ込んだステアリングタイロッドのビス穴にも、AAタイプのビスをセットする。



1番のプラスドライバーを使い、ビスを真っすぐにねじ込む。ビスがねじ込めなくなったらOKだ。

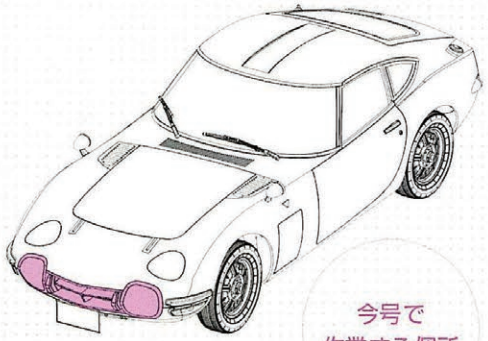


これでステアリングタイロッドの取り付け作業は完了だ。ステアリングタイロッドによって左右のステアリングナックルが連結され、連動するようになった。組み立てたシャシーフレームは、次回の作業に備えて大切に保管しておこう。

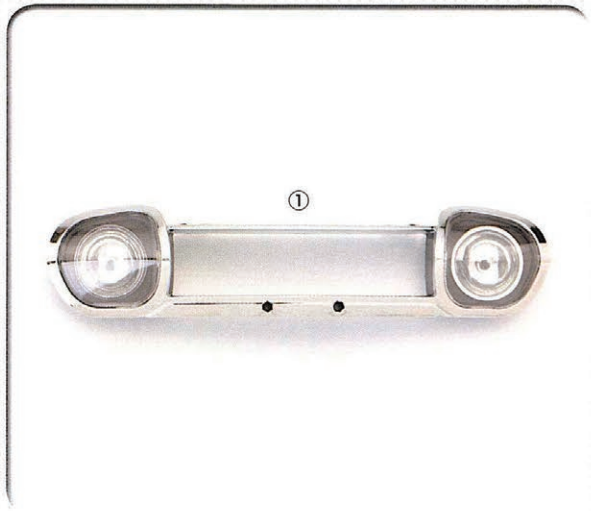
53号

フロントグリルをフォグランプユニットに仮組みする

今号では、52号で提供したフロントグリルを「フォグランプユニット」に取り付けて仮組みする。左右のフォグランプは組み立て済みの状態で提供されているので、作業自体は比較的容易だ。ただし、固定用のビスは後の号で提供されるので、それまでパーツを傷めないよう注意して保管しよう。



今号のパーツ



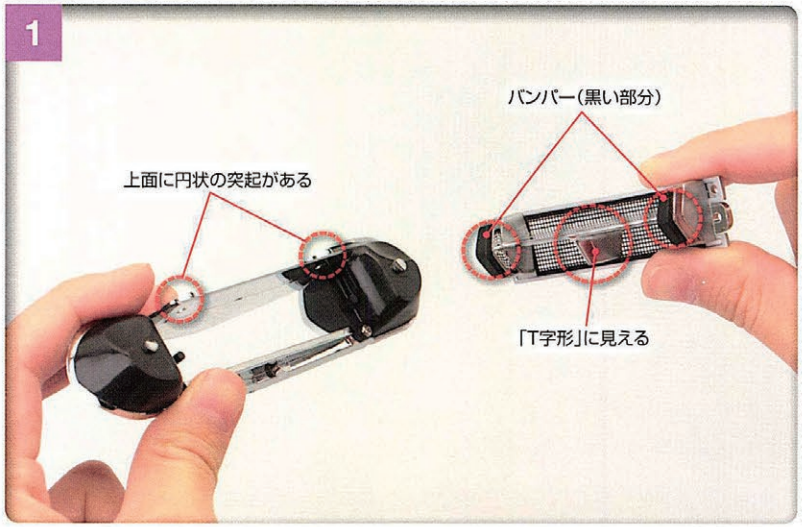
①フォグランプユニット×1

使用する道具

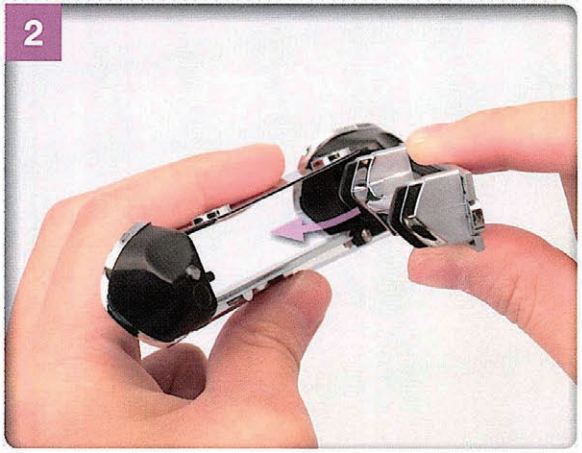
・特になし

用意するもの

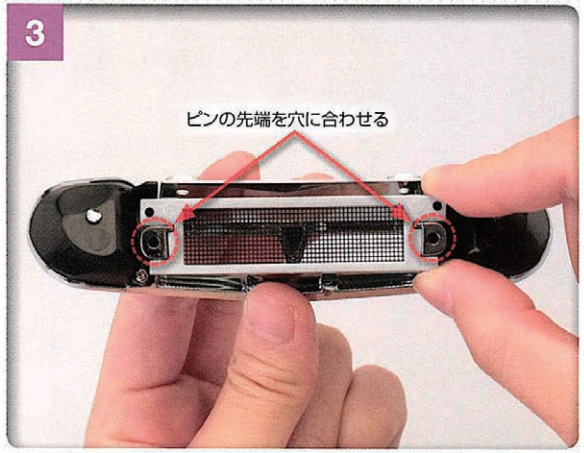
・フロントグリル(52号で提供したもの)
・ティッシュペーパー(もしくは柔らかい布)
・52号のパーツを保管していたビニール袋
・油性ペン



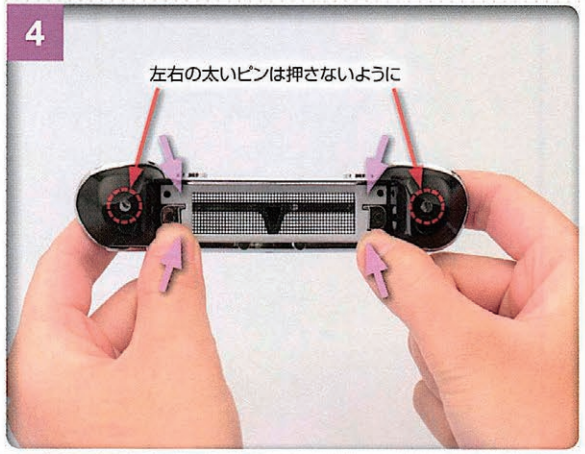
52号で提供したフロントグリルと①フォグランプユニットを用意し、取り付ける向きを確認しよう。フォグランプユニットは円状の突起がある側を上面に、フロントグリルは黒いバンパーを手前に、さらに中央部が「T字形」に見える向きで持つ。



フォグランプユニット中央の開口部に、フロントグリルを真っすぐに差し込む。



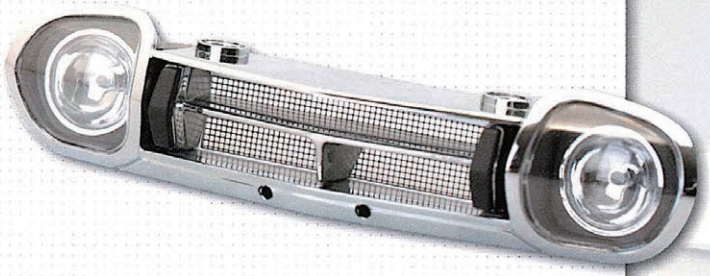
フロントグリル左右の取り付け穴と、フォグランプユニットの取り付けピンの位置を合わせる(写真参照)。



フロントグリル周囲の樹脂パーツ部分を軽く押し込んで、パーツを仮留め状態にする。メッシュ部分を押すと、メッシュがゆがんだり、塗料がはがれる恐れがあるので、触れないように注意しよう。なお、フォグランプユニット左右から突き出しているD字形の太いピンは"フォグランプを固定している部分"なので押さないこと。

ティッシュペーパーや柔らかい布などを使い、フロントグリルに付着した指紋や汚れを拭き取る。メッキパーツは指先の油脂分が付着しやすいので、この段階でクリーニングしておこう。

今号の完成



これで今回の作業は完了だ。TOYOTA 2000GTの顔であり、アイデンティティーともいえる「T字エンブレム」のフロントマスクが完成した。なお、実車のフォグランプは販売時期によって仕様が異なり、今回提供したパーツのフォグランプは、"レンズパターンが刻まれていないタイプ"をモデル化している。組み立てたパーツは、傷などが付かないよう大切に保管しておこう。

組み立てたパーツはティッシュペーパーで包み、号数を記載したビニール袋に入れて保管しよう。52号のパーツを保管していたビニール袋へ一緒に入れるといいだろう。